

## 紀田順一郎の読書論

山家 仁美

本研究は、戦後昭和期から現在にかけて活躍する紀田順一郎の読書論を分析した。

読書論とは、著者が自らの思想や読書経験に基づき、読書に関する主張や読書の理想を述べたものである。読書の歴史研究において、読書論を研究したものがあつた。著者自身の思想や読書経験に基づいた過去の読書論に着目しつつ、読書の理想の変遷を明らかにしてきた。一方で、過去のメディアや社会と読者との関係、読書調査などの統計資料の分析といった社会的な方法で行なわれる読書の歴史研究では、読書の変遷についてより実証的な解明が目指された。読書論を研究対象とすることは、調査資料等のデータに基づく研究に比べ客観性に欠け、読書の実態をつかむことが難しいとされる。しかし、ある時代に著された読書論を分析すると、取り上げられる著作やその読み方についての指南から、社会調査の分析だけでは見えなかつたその時代における読書の理想を見出すことができる。人間の文化的行為である読書の理想像が、歴史の経過の中でどのように変遷してきたかを明らかにすることが、読書論を研究する意義である。

これまでの読書論の研究には、明治期から昭和戦前までの読書論の系譜を文献解題としてまとめたものや、昭和初期における日本の知識人の読書論について研究した論文などがある。しかし、これらの研究で対象となつた読書論は昭和戦前期までのものであり、戦後の時期に着目した読書論の研究は十分になされているとは言い難い。

本研究の対象となる紀田順一郎は、『現代人の読書』（三一書房、1964年）をはじめとして現在まで約50年に渡り読書論を展開している。このように、戦後において継続して読書についての執筆活動を行なつてきている重要な人物であるにも関わらず、これまで紀田の読書論を扱つた研究はない。本研究では、読書の目的や対象、読む方法、読書の環境や用いる道具、さらに読者に関することも含め、読書をめぐる幅広い言説をまとめて読書論として捉え、著書（計35件）の分析を通して紀田順一郎の読書論を考察した。

本研究の結果、若い世代、学生やビジネスマンを主な対象として書かれてきた紀田順一郎の読書論は、自身の読書体験にも基づきつつ、教養主義など時代的に先行する読書論を批判的に継承しながら形成されてきたものであることが分かつた。また、新しい時代の中で読書に対する要求の多様化や情報化社会の到来を意識しながら、新たに生み出される技術を活用した読書の具体的な方法を説くなど、時代変化に合わせて柔軟に読書論を展開してきたことも指摘できる。

このように読書論が時代性を帯びていることを踏まえれば、戦後における読書論や社会の動向の中に紀田順一郎の読書論を位置づけることで、読書の歴史を探ることができると考える。

（指導教員 原 淳之）